

第34回 日本死の臨床研究会年次大会 市民公開講座
厚生労働省委託事業「緩和ケア普及啓発事業」Orange Balloon Project

- 【開催日程】 2010年11月6日(土)、7日(日)
- 【会場】 盛岡市民文化ホール(マリオス)
- 【参加者】 2500人 医療福祉教育の関係者及び一般市民
- 【企画報告】



医療者はもちろん一般参加市民を対象に、第34回日本死の臨床研究会年次大会において、緩和ケアの啓発普及を目的とした市民公開講座(2日間、4講座)を行いました。日本死の臨床研究会は、「死の臨床において患者や家族に対する真の援助の道を全人的立場より研究していくこと」を目的に、1977年から30年以上にわたって、いのちに関わる医療・教育・福祉・生活などの様々な分野で、患者や家族に対して緩和ケアの啓発普及活動を行っています。

本大会のテーマは「地域で看取る」としました。宮沢賢治の「南ニシニサウナ人アレバ、行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ」をメッセージとして、市民公開講座では、主に東北を舞台に活躍する4人の講師をお招きし、大会参加者や一般市民へ、厚生労働省委託 緩和ケア普及啓発事業「オレンジバルーンプロジェクト」をアピールし、緩和ケアの啓発普及に努めました。

- ① ブース出展
「オレンジバルーンプロジェクト」
ポスター展示、チラシ、ピンバッジ、携帯ストラップ、リーフレット配布



② 市民公開講座 1 (11月6日 (土) 14:30~16:00)

『納棺夫日記』著者 青木新門氏「命のバトンタッチ～映画「おくりびと」に寄せて」



「人は必ず死ぬんだから、いのちのバトンタッチがあるんです。死に臨んで先に行く人がありがとうと言えば、残る人がありがとうと答える。そんなバトンタッチがあるのです。死から目を背けている人は、見損なうかもしれませんが、目と目で交わす一瞬のいのちのバトンタッチがあるんです」

臨終の場に立つということは、五感で死を認識すべきだということです。

③ 市民公開講座 2 (11月6日 (土) 16:15~17:15)

木村秋則氏「奇跡のりんご」

農薬なしには収穫不可能と言われた林檎を肥料・農薬・除草剤など何も使わないで栽培する農業を実践してきました。

私は自然から学びました。草ぼうぼうの土ほどいいにおいがしている。砂利や山のタンポポは誰も肥料も農薬もやらないのに、虫一匹いない。そして花が咲いています。

私の林檎畑には穴のあいた葉があります。それは虫が食ったからではなく、林檎の木が、菌のついた患部だけを落とすのです。他の畑では、葉が枯れて落ちてしまうのです。



④ 市民公開講座3 (11月7日 (日) 12:30~13:30)

金城学院 学長 柏木 哲夫 先生「人生の実力」



物事が順調に進んでいる時には、人の底力は見えにくい。つらい、悲しい、やるせない状況、すなわち自分にとって不都合な状況になった時、どのような態度でその状況に対処できるかで、その人の「人生の実力」が決まります。その中に、人間として生きている証を見ることができ、感謝を見いだすことが「人生の実力」につながるのです。

日々の生活の中で少しずつ実力を養成したいものだと思います。

人生の実力者がよく使う三つの言葉です。

- 1) 感謝の言葉・・・ありがとう
- 2) ねぎらいの言葉・・・ご苦労様
- 3) 謝罪の言葉・・・ごめんなさい

⑤ 市民公開講座4 (11月7日 (日) 13:45~15:15)

作家 浅田 次郎 先生「近代史の中の“いのち”」

第二次世界大戦の日本の死者が310万人、ドイツが800万、そしてロシアが2,660万、自らの天命を全うせずして死んだ人の数です。310万という数は310万個の命です。その一つひとつには生活があり、家族があり、血脈がありました。

「醫」という字は、酒がめを前に、酒で体を清め、矢を取り出して、病人の周りを踊りながら、悪魔の退散を祈ったという、医者原義的な姿を現しています。祈るしかなかったのです。そこにあるのは、患者を治すという使命感と、シャーマンとしての情熱だけです。そして、この意味を一番意識したのは、戦地にあった軍医だと思います。傷付いた兵士たちを看取った軍医、戦争という理不尽の中で、その死と向きあわなければならなかったのは、まさに彼らではなかったかと思っています。

